

大使コラム（2013年6月）

6月、リスボンでは今年も街路樹に青紫のジャカラランダの花が咲き始めています。この花の微妙な色を何と呼ぶのか、色彩辞典を持ち出して素人鑑定をやってみました。紫系統の色だけでも30以上の名称がありましたが、一番近いのは「紅掛花色（べにかけはないろ）、英語名は Gentian Blue（りんどうの花の青）」であるように思われました。この花が咲き始めると、リスボンでは、いよいよ夏が近づいたという実感がします。

色彩感覚といえば、ポルトガルで気づくことの一つは、家屋の壁の色使いです。一戸建てだけでなく集合住宅でも、各棟ごとに壁面全体がピンク、青、黄、茶色または緑などの単色に彩られ、色とりどりの建物が並んで市街地を作っている風景をよく見かけます。かつて住んだカナダのモントリオール市でも、ポルトガル移民の地区だけは同様でした。これは、家の外壁や内壁にタイル（アズレージョ）を張り巡らす伝統的なポルトガルの建築様式と関係があるのでしょうか。家の壁面の色彩は、いずれも現代のアズレージョで使われる色彩の一つが用いられているようで、ポルトガル人の色彩感覚を表しているのかもしれませんが。

さて、この国の政治・経済の課題は引き続き財政緊縮の問題を巡って動いています。増税や不景気で、庶民の可処分所得が減少している状況は、各方面の話からも実感されます。スーパーマーケットも大手のところより比較的価格の安い町内の店に客が増えていること、工場の社員食堂で昼食のビュッフェの消費量が増え、ここでお腹を満たそうとする人が増えているのだとの話も聞きました。

経済活動の指標となる交通量の動き（国立統計院）も、昨2012年のリスボンおよびポルト地区の地下鉄の乗客数は、それぞれ前年比△13%、△2%、また、鉄道の乗客数も、市内電車で△11%、諸都市を結ぶ長距離電車で△10%とのことです。主要河川を渡るフェリーの利用客数も、△12%と減少しています。この傾向は今年も続いていると見てよいでしょう。

他方、国税収入（財務省）を見ると、本年1－4月期の前年同期比では、全体で5.8%の増収です。内訳は、直接税で+17%（個人所得税+24%、法人税△13%）、間接税で△1%（付加価値税は微減、ガソリン税△6%、印紙税△4%等）です。ここからは、税収増がもっぱら個人所得税の増税に依存している構図が見てとれます。

こうした中で4月末には、今後4年間の構造的財政支出の削減策の方針を示す「中期予算計画」がEU委員会および当国議会に提出されました。2017年に構造的財政赤字をGDP比で0.5%にする目標を掲げ、財政削減額を14年に28億ユーロ（先般の違憲判決による予算不足の13億ユーロ分を含む）、15年に7億ユーロ、16年に12億ユーロ行うとの内容です。

また、違憲判決による予算不足を補填する「補正予算」も、5月末にようやく国会に上程されました。この中には、先の違憲判決に触れる項目（年金生活者への課税増等）が含まれているとの指摘もあり、さらなる違憲問題の可能性も払拭できません。また、「中期計画」

の一部について、連立与党の民衆党に異論もくすぶっています。しかし、コエーリョ政権は国民の反発を受けながらも、政治的には当面の危機を乗り越えてきました。

先月は、トロイカ支援後初めてとなる「10年物の国債」を、シンジケート団が引き受ける形ですが発行し、30億ユーロを自前で調達することもできました。国際市場への復帰に向けた一歩、と認めることはできるでしょう。

トロイカによる支援期間もあと1年となり、上記の諸措置を経て、トロイカ支援の終了後の施策についても議論が始まったように見えます。また、当国政府の緊縮策は国内的には不評ですが、トロイカ側の評価は非常に高いものがあります。経済再生の成否に影響する国際環境の面では、欧州経済の低迷がマイナス材料ですが、ユーロ体制の整備は昨年来、着々と進んできました。9月のドイツ総選挙で同国の支援策が今後どちらに向かうのかが、これからの焦点になっていくでしょう。

依然として前途多難な当国ですが、引き続き注意深く動向を見ていきたいと考えています。

時節柄、皆様にはご自愛のほどをお祈り申し上げます。